

「面白いのが、で消えたと思われる場所が、この校舎のこの隣の棟、階段だつて話」

美澄は息を語気を荒げながら話す。どこからそんな情報を持つて着たんだ、半ば呆れたような顔で緒岸が頷く。間をおかず話を続ける。声のトーンも少し上がってきた。

「人が消えてきて一人になったところで消えるらしいよ」

「……でな、な、なんと、時間もだいたい今頃！」

目を輝かしながら話す。緒岸には次の台詞が頭に浮かんた。彼女の性格を考えるにどう転んでもめんどくさい事になる未来しかない。

「なるほど」「いか「いかないかな」

緒岸は相槌を打ちつつも行かせないよう食い気味に意思を表明した。会話を打ち切られ美澄はむくれている。

美澄を置いてきぼりにしよう、逃げるのが得策だと思い緒岸は前に歩き始めた。ライトを前の方に向けたので美澄が闇の中に消える。

少し歩くと明るい廊下が見えてきた、下校しようとしている生徒もちらほらという。普通の学校に戻ってきた気分だ。

後ろから美澄が走ってくる音がした。さすがに明かりがない状態だったので小走りだったが、明るい廊下に入る前に合流した。

「えー？　なんでいかないの？　こういうの好きじゃん」

全身を使い訴えかける。美澄はなんとしてでも行きたいらしく、行かないなんてなんと常識知らずなんだ、理不尽な事を言ってくる。

「まず、さつきも言ったように何人も消えてるっていう事実はあるし、何かしらあると思う。監禁とか、拉致とか、あまり安全に帰れる未来が見えない」

緒岸はめんどくさい事があまり好きではない、冷静に論じた。

「いや、幽霊でしょ、普通に考えて」

つまんなそうな物を見る目でこちらを見て来る。手をぶらぶらさせながらこれだからコンピュータはとか言ってるのが緒岸の耳に入ったがそれでも動かない。

しかし彼女はこのママ引き下がない事を緒岸は知っている。落とし所を提案せねば、さてどうしたものか。そう思いながら緒岸は下駄箱から靴を取り出す。

彼女も何かを考えながら渋々下足に履き替える。呆れ顔でそれを見てると彼女が突然話し始めた。

「なら準備、準備してなら大丈夫でしょ！？」　拉致、監禁等を考えた装備で行けば良いじゃない！」

これでどうだと胸を張り、決定でしょ？　という視線をぶつけて来る。緒岸はキョトンとした顔で美澄をみる。今がチャンスと畳み掛ける。

「なんのための「」よ？　こう言う時使うのが「」でしょ？」

これには流石に反論を入れる。

「なるほど？　でも装備とはいえ、金かかるんじゃない？　あまりお金は使いたくないなあ」

「大丈夫よ！　装備って言ってももう持つてる物を使うわ、例えば前買った変なガジェット！　あの自分の生存、位置情報を電池が切れるまで

送り続け切れたらすごい事になるとか言ってた変な最強防犯キーホルダーとか」

緒岸の心の中では葛藤が起こっていた。めんどくさい事になると思いつつ、この前買ったガジェットの事を考える。

確かにあのガジェット（変ではない）一日使っただけでまだ非常事態の実験をしていない。

そもそも校舎のセキュリティや街の治安を考えてもどうせ大事になるはずない。ガジェットのテストはありだな。

歩きながら思考を巡らす。だいたい提案を飲んでいるがここで提案を飲むのは負けた気がする。